

# 拡大投射原理について\*

---

大 村 光 弘

---

## 0 はじめに

本稿では、Chomsky (1993、1994) において提案されている極小主義プログラム (minimalist program) の基本的な方針に従って、GB 理論 (government and binding theory) が含んでいた(1)の規定をいかにして一般原理から導いたらよいかを考察する。

(1) 節は必ず主語を必要とする。

以下、節に主語が現われる現象を拡大投射原理 (Extended Projection Principle) の効果と呼ぶことにする。最終的には、(1)の規定は(2)の要求から導かれると主張する。

(2) TnsやVの強い格素性 (Case feature) は Spell-Out の前に照合を終えなくてはならない。

関連する極小主義の仮定は(3)-(6)として示してある。

(3) 言語表現 (linguistic expression) は、インターフェイスにおける合法的な実体のみから構成される ( $\pi$ ,  $\lambda$ ) という対である。(cf. Chomsky (1993: 4-5, 1994: 4-5))

(4) 移動は、形態的要求からのみ駆動される。例えば、ある種の形式素性 (formal feature) は主要部 (head) の照合領域 (checking domain) において照合されなければならない。<sup>1</sup>

(5) 強い素性は PF において可視的であるのに対し、弱い素性は PF にお

いて不可視的である。PFの合法的対象物ではない強い素性がSpell-Outの後に残っていると、派生は破綻 (crash) する。

- (6) LFでの操作は、顕在的統語部門 (overt syntax) での操作よりもコストが低い。

## 1 極小主義以前の仮定

1節では、GB理論が「節は必ず主語を必要とする」という規定を加えるに至った理由を振り返ると共に、この規定が持つ概念的課題点を指摘する。

### 1.1 拡大投射原理の規定的性質

(7)に示したD構造表示において、母型節の主語位置は非 $\theta$ 位置であるので、投射原理 (Projection Principle) それ自体は、この位置が語彙的に満たされることを要求しない。

- (7) *e* is likely that John is here.

しかし、表層では問題となっている位置に虚辞が生起しなくてはならない。

- (8) a. It is likely that John is here.  
b. \*Is likely that John is here.

このことから、Chomsky (1981, 1982: 10) は、「節は必ず主語を必要とする」と規定した。このように、この規定を設けた目的は、節の主語位置に虚辞が生起することを保証することにあった。

ここで、この規定が不要となる事例について考察してみよう。例えば、(9)において、問題となっている規定だけでなく(10)に示した $\theta$ 規準( $\theta$ -criterion)もまた、主語名詞句の生起を要求する。

- (9) a. John hit Mary.  
b. \*hit Mary.

- (10) それぞれの項はただ1つだけの $\theta$ 役割をもち、且つ、それぞれの $\theta$ 役割はただ1つだけの項に付与される。(Chomsky (1981: 36))

(9b)において、動詞 *hit* の外部 $\theta$ 役割 (external  $\theta$ -role) を受け取るべき名詞

句は欠如している。したがって、 $\theta$  規準によって (9 b) は排除される。

つぎに、受動文において主語位置が名詞句によって占められる現象を考察してみよう。

- (11) a. Mary was hit *t*.  
 b. \*Was hit Mary.

(11 a)において、名詞句 Mary は、基底位置で動詞から格を受け取ることができないので、主語位置に移動することで、Infl から主格を受け取っている。この移動を欠く (11 b) は、(12) に示した格フィルター (Case Filter) によって排除される。

- (12) 音声内容を持つが格を持たない名詞句を排除せよ。(Chomsky (1981: 49))

## 1.2 VP 内主語仮説

Chomsky (1986b) は、従来 S や  $\bar{S}$  と呼ばれてきた範疇もそれ独自の主要部をもつ最大投射範疇であるという提案をしている。例えば、S は Infl を主要部とする IP であり、 $\bar{S}$  は Comp を主要部とする CP であるというものである。この句構造表記を用いると、「節は必ず主語を必要とする」という規定は、(13) として言い換えられる。

- (13) (S 構造において、) [Spec, I] 位置は語彙的要素によって満たされなければならない。<sup>2</sup>

ここで、VP 内主語仮説 (VP-internal subject hypothesis; cf. Kitagawa (1986)、Koopman and Sportiche (1991)、Kuroda (1988)、etc.) を採用した場合の帰結について考えてみよう。VP 内主語仮説を採用する分析では、基底主語 (すなわち、外項 (external argument)) に対する統語位置は、 $\theta$  規準の要求により述語の投射内に確保される。したがって、VP 内主語仮説の下では、[Spec, I] 位置は動詞の主題特性とは無関係に非  $\theta$  位置となる。

- (14) a. [<sub>IP</sub> John<sub>i</sub> Infl [<sub>VP</sub>  <sub>$\bar{t}$</sub>  hit Mary]]  
            $\bar{\theta}$                    $\theta$

- b. [<sub>IP</sub> It Infl [<sub>VP</sub> seems that John is here]].

$\bar{\theta}$

帰結として、(9)に関して生じた余剰性(「節は必ず主語を必要とする」という規定だけでなく  $\theta$  規準の帰結としても、[Spec, I]が名詞句によって占められることが導かれる)は生じない。<sup>3</sup>

### 1.3 格と拡大投射原理

拡大投射原理の効果と格理論との関係に議論を移してみよう。

- (15) a. [<sub>IP</sub> John [<sub>VP</sub> *t* hit Mary]].  
 b. Mary believes [<sub>IP</sub> John to [<sub>VP</sub> *t* like him]].  
 c. [<sub>IP</sub> John was [<sub>VP</sub> hit *t*]].  
 d. [<sub>IP</sub> John seems to [<sub>VP</sub> *t* like Mary]].

(15 a)-(15 d)に示した繰り上げに関わる構文において、規定(13)は、移動を受けける名詞句に課せられる格の要求から導きだされる。つまり、(15)において、VP内にある名詞句 *John* は基底位置で格を受け取ることができないので、格を受け取ることができる位置(即ち、[Spec, I])に移動しなくてはならないからである。前節で、 $\theta$  規準の帰結として [Spec, I] 位置が名詞句によって占められる事はないと言う結論に達したので、(15)に挙げた事例に限って言えば、拡大投射原理の効果は格理論の下で包括的に説明されうる。

つぎに、虚辞の分布を考察してみよう。

1.1節で見たように、「節は必ず主語を必要とする」という規定を設けたもとの動機は、節の主語位置に虚辞が現われることを保証することであった。したがって、一般原理から虚辞の分布が完全に説明されれば、(13)の規定を設ける必要もなくなることになる。虚辞の分布に関して注目すべき点が2点ある。第1に、(16 a-b)と(16 c)の間の対比から明らかなように、虚辞は格が付与される位置に生起しなくてはならない。

- (16) a. *It* is raining.  
 b. I believe [*it* to be clear that John is here].  
 c. \*I tried [*it* to be likely that John is here].

同じ事が(17 a-b)と(17 c-d)の間の対比にも当てはまる。

- (17) a. *There is a man in the room.*  
 b. I believe [*there to be a man in the room*].  
 c. \*It seems [*there to be a man in the room*].  
 d. \*I tried [*there to be a man in the room*].

このことから、虚辞は格を必要とする要素（すなわち、名詞句）であると見做すことができる。第2に、虚辞は主題的に要求されない要素であるので、D構造表示には存在せず、派生のある段階で句構造に挿入されると考えるのが自然である。

ここで、暫定的に(18)を想定してみよう。

- (18) 格付与子の持つ格は付与されなければならない。

(18)の仮定と先に述べた虚辞に関する2つの特性から、[Spec, I]への項の繰り上げが無いためにInflが主格を放出できない場合、虚辞が[Spec, I]に挿入されると言うことができる。このように、(15)-(17)に見られる拡大投射原理の効果が格理論から導かれるならば、「節は必ず主語を必要とする」という規定を文法から取り去ることができる。このことは、文法の簡潔さという点で望ましい帰結である。次節では、格に基づいて拡大投射原理の効果を説明するという基本方針は変えないものの、更に一般性の高い原則からこの効果を説明する。

## 2 格に基づく極小主義的説明

Chomsky (1993) の提案(19)は、拡大投射原理の効果を形式素性に課せられる一般的な要求から導き出すという点で望ましい方向にある。

- (19) 英語の Tense の NP 素性は強い。したがって、NP は Spell-Out 前に [Spec, [Agr T]] に繰り上がらなければならない。(Chomsky (1993: 31))

以下の議論では、この提案をさらに拡大し、拡大投射原理の効果を格素性に課せられる照合要求から完全に導きだすことを提案する。また、前節で採用した VP 内主語仮説や、虚辞は格を必要とするという仮定はそのまま採用する。

## 2.1 駆動因の見掛け上の欠如

最初に、ECM 動詞の補文における名詞句の顕在的繰り上げについて考察してみよう。

- (20) a. We believe John to have been elected *t*.  
 b. We believe John to have *t* won the election.

(20 a)では、動詞の目的語が補文の主語位置に顕在的に繰り上がっているように見える。一方、(20 b)では、VP 内主語が補文の主語位置に顕在的に繰り上がっているように見える。Chomsky の仮定に従えば、この顕在的移動は格の要求から駆動されているとは言えない。これは、以下の理由による。Chomsky は、動詞による格照合は(21)に示した構造形で行なわれると仮定している。

- (21) . . . [<sub>AGROP</sub> DP [<sub>AGRO</sub> [<sub>AGRO</sub> V [<sub>AGRO</sub> AgrO]]] [<sub>VP</sub> *t* *t*<sub>DP</sub>]]

(21)において、V は AgrO に繰り上がって複合体を形成している。目的語は、基底位置から [Spec, [V AgrO]] に繰り上がっている。このとき、AgrO 複合体に包含されている V は、[Spec, AgrO] にある目的語の格素性を照合する。さらに、Chomsky (1993: 8) は、格照合に関するこの構造形を ECM 構文にも適用している。つまり、このことは、ECM 動詞も(21)の構造形において補文の主語名詞句の格を照合することを意味する。Chomsky は、英語の AgrO の V 素性は弱いと仮定しているので、英語において V が AgrO に繰り上がるのは LF の段階でなくてはならない。もしそうなら、(20)に示される名詞句 *John* の顕在的繰り上げに対する駆動因はいかなるものであろうか。Chomsky (1993, 1994) は、この移動に対する駆動因について何ら適切な説明を与えていない。

つぎに、議論を(22)に移してみよう。

- (22) a. We consider *it* to be clear that John won the election.  
 b. We consider *there* to be a man in the room.

(22)では、動詞 *consider* の補文の主語位置に虚辞が挿入されているように見える。虚辞がこの位置に生起しなくてはならない理由は、いかなるものであろうか。もし、Chomsky が主張するように、ECM 動詞が補文の主語名詞句の格を照合するのは LF の段階であるとする、(22)における虚辞挿入は格に基づいて説明されないことになる。

## 2.2 分裂 VP 仮説

この節では、Koizumi (1993)の提案する分裂 VP 仮説(split VP hypothesis)を採用することで、前節で指摘した問題に対して統一的な説明を与えることができることを示す。具体的には(20)と(22)に見られるような不定詞補文における拡大投射原理の効果は、ECM 動詞の強い格素性に課せられる照合要求から導かれると主張する。

Koizumi (1993) は、基本的な節構造として(23)を仮定している。

(23) [<sub>AGRS<sub>P</sub></sub> AgrS [<sub>TP</sub> Tns [<sub>VP</sub> V<sub>2</sub> [<sub>AGRO<sub>P</sub></sub> AgrO [<sub>VP</sub> V<sub>1</sub> (acc.)]]]]]]

Koizumi (1993: 112ff) は、英語の動詞の格素性(すなわち、対格素性)は強いと仮定している。帰結として、V<sub>1</sub> は顕在的に AgrO に繰り上がり複合体を形成したのち、[Spec, [V<sub>1</sub> AgrO]] に繰り上がった目的語名詞句の格素性を照合しなくてはならない。Koizumi はさらに、(23)における V<sub>2</sub> の V 素性は強いという単純な仮定によって、AgrO 複合体が顕在的に V<sub>2</sub> に繰り上がると想定している。しかしながら本稿では、(24)の仮定によってこの効果を導くことにする。

(24) a. V<sub>2</sub> は、範疇素性 (categorial feature) は持つが、音韻素性 (phonological feature) を欠く軽動詞 (light verb) である。

b. V<sub>2</sub> には [+affix] という素性がある、V<sub>1</sub> のもつ [+affix] 素性を照合する。

範疇素性を持つ要素は、強勢付与 (stress assignment) 等の音韻規則の適用対象である。この意味で、V<sub>2</sub> は PF において可視的な対象物であると言える。しかしながら、V<sub>2</sub> は音韻素性を欠くという理由から、実際の PF 規則の適用には従わない。結果として、V<sub>2</sub> が単独で PF 表示に現われた場合、発音できない非合法的な PF 対象物となる。この状況は、顕在的統語部門の段階で、複合動詞 [V<sub>2</sub>-AgrO-V<sub>1</sub>] が形成されることによって回避される。

## 2.3 提案

分裂 VP 仮説に基づいて、(20)を分析してみよう。(25)は(20 a)に対する Spell-Out 時の構造を示している。

(25) We [<sub>VP<sub>2</sub></sub> believe [<sub>AGRO<sub>P</sub></sub> John<sub>i</sub> <sub>AGRO</sub> [<sub>VP<sub>1</sub></sub> <sub>t<sub>v</sub></sub> [<sub>AGRS<sub>P</sub></sub> to have been elected

t]]]].

(25)において、*John* は *believe* の強い格素性を放出させるために、顕在的統語部門の段階で [Spec, AgrO] に繰り上がっている。このように、格の理由によって ECM 補文内の要素が顕在的に主節に繰り上がるのであれば、(20)に見られる拡大投射原理の効果もまた、一般的な照合理論から導くことができる。但し、この場合の拡大投射原理の効果とは、もはや(13)に示した現象ではない。つまり、ECM 構文において繰り上げ操作を受ける名詞句の着地点は、埋め込まれた [Spec, AgrS] ではなく主節の [Spec, AgrO] だからである。ECM 構文において、顕在的に繰り上げられる名詞句の着地点が埋め込まれた [Spec, AgrS] でなくてはならないという強い証拠がない限り、この仮定をそのままり続けることにする。<sup>4</sup>

ECM 構文に関して、不定詞補文の主語に見える要素が実際には、主節まで繰り上がっている証拠を挙げることにする。

- (26) a. I've believed John<sub>i</sub> *for a long time now* [<sub>t</sub> to be a liar].  
 b. I have found Bob<sub>i</sub> *recently* [<sub>t</sub> to be morose]. (Kayne (1985), Postal (1974), cited in Koizumi (1993: 117))

- (27) a. \*I've believed *for a long time now* John to be a liar.  
 b. \*I have found *recently* Bob to be morose. (Koizumi (1993: 118))

(26)と(27)の対比が示すように、不定詞補文の主語は、主節の述語を修飾する副詞の左側に現われなければならない。主節を修飾する副詞は埋め込み節内に現われることができないので、(26 a)における *John* と(26 b)における *Bob* は主節内に生起していると言える。このことは、ECM 動詞の不定詞補文の主語が顕在的統語部門の段階で、既に主節内に繰り上がっていることを意味している。

つぎに、(22)に示したような虚辞の生起に議論を移してみよう。英語の V の格素性は強いと仮定したので、ECM 動詞の強い格素性は顕在的統語部門の段階で放出されなくてはならない。(28)では、(25)の場合とは異なり、VP 内に基底生成された名詞句が [Spec, AgrO] に移動することによって、この要求が満たされることはない。

- (28) Pre-Spell-Out :





て必ず空格 (null Case) を指定される。(ii) 空格は、以下に挙げる 3 つの特徴を持つ Tns によって照合される。第 1 に、非定形 (non-finite) である。

- (33) a. \*John said that PRO like Mary.  
 b. John promised Mary [PRO to bring the beer].

第 2 に、Fukui and Speas (1987)、Lobeck (1990)、Saito and Murasugi (1990) 等の意味で、[Spec, T] にある要素と指定辞主要部一致 (Spec-head agreement) の関係にある。この特徴を持つ非定形の Tns は、VP 省略を許す。

- (34) a. John wasn't sure he'd [<sub>VP</sub> win the race], but [he tried [<sub>TP</sub> PRO  
 [<sub>T</sub> to][<sub>VP</sub> e]].  
 b. ?\*Mary claims to not [<sub>VP</sub> like basketball], but she appears to  
 [<sub>VP</sub> e]. (Martin (1992: 11))

第 3 に、主節の時制を基準にすると、補文の時制は実現されていない (Stowell (1982))。

- (35) John promised Mary [PRO to bring the beer].

(35)において、John が Mary に約束した時点では、約束の内容はまだ実現されていない。

PRO は音声的に空であるので、VP 内主語仮説を採用した場合、顕在的統語部門の段階で [Spec, T] に移動しているとは言えない。仮に、埋め込まれた Tns の空格素性は弱いと仮定してみよう。従来、PRO は wh 痕跡とは異なり wanna 縮約を許すと想定されてきたが、その理由は解明されていない。定義によって、制御述語の補文の Tns の空格素性は、LF において照合されるので、顕在的統語部門の段階では、まだ VP 内にとどまっている。したがって、(36 a) に対する Spell-Out 時の表示は (36 b) となる。<sup>5</sup>

- (36) a. John wants to leave the room.  
 b. John wants [<sub>CP</sub> [<sub>TP</sub> to [<sub>VP</sub> PRO leave the room]]]

(36 b)において、*wants* と *to* の間に PRO は介在していない。もしこの分析が正しいなら、wanna 縮約は、want と to の間に (wh 痕跡であれ PRO であれ) 要素が介在しない時に可能であるという主張ができるかもしれない。

### 3 虚辞に関するさらなる考察

「節は必ず主語を必要とする」という規定を設ける動機となっていた虚辞挿入の理由に対して、条件(29)を提案したが、ここでは、虚辞の *it* と *there* に対して(37)-(38)を仮定することで、これらの要素の振る舞いに関するさらなる事実が説明できることを示す。

- (37) a. 虚辞の *it* は格素性と  $\phi$  素性を持つ。  
 b. 虚辞の *there* は格素性を持つが、 $\phi$  素性を欠く。
- (38) *there* は作用域標識 (scope marker; Williams (1984)) であり、且つ、存在数量詞 (existential quantifier) である不定名詞句を非対称的に統御しなければならない。

#### 3.1 虚辞の *there*

Chomsky(1991)では、*there* 構文のもつ特性として(39)-(41)を挙げている。

- (39) *there* 構文は交替形を持つ。  
 a. There is a man in the room.  
 b. A man is in the room.
- (40) 不定名詞句は、*there* に対してある種の形式的関係にある(以下、この不定名詞句を *there* の関連要素 (associate) と呼ぶ)。  
 a. There is a man in the room.  
 b. \*There is true that he is honest.
- (41) 動詞は、*there* とではなく関連要素と一致を示す。  
 a. There are lots of women in the room.  
 b. \*There is lots of women in the room.

以下の議論では、これらの特性に対して説明を与えていく。

まず始めに、(39 a)と(39 b)に対して同一の基底構造(42)を想定する。

- (42) [<sub>AGRSP</sub> . . . [<sub>VP</sub> is [<sub>SC</sub> a man in the room]]]

*be* 動詞が小節 (small clause) をとるといふ分析に関しては、Chomsky (1991、1993、1994)、Lasnik (1992、1993)、Safir (1987) 等を参照。(42)において、

関連要素 *a man* が主格を持つと仮定してみよう。この名詞句は顕在的に [Spec, [T AgrS]] に繰り上がり、そこで主格の照合を受ける。結果として、(43) (= (39 b)) の形式がもたらされる。

(43) [<sub>AGRSP</sub> [a man]<sub>i</sub> [is-T-AgrS]. . . [<sub>VP</sub> *t<sub>v</sub>* [<sub>SC</sub> *t<sub>i</sub>* in the room]]]

語彙部門において be 動詞に、Lasnik (1992, 1993) の意味での部分格 (partitive Case) が随意的に指定されると仮定してみよう。部分格を指定された be 動詞は、部分格を持つ名詞句の格素性を照合しなければならない。Belletti (1988)、Lasnik (1992, 1993) 等が主張するように、部分格は名詞句の持つ定 (definite) の意味と両立しないとすると、there 構文における定性 (definiteness) の効果が導かれる。すなわち、部分格をもつ関連要素は不定名詞句でなければならない。ここで、部分格の照合についてもう少し詳しく見てみよう。Lasnik (1993) に従って、部分格は構造格 (structural Case) であり、LF において [Spec, [be AgrO]] で照合されると仮定すると、(39 a) に対する Spell-Out 時の表示と LF 表示は、それぞれ、(44) と (45) となる。

(44) [<sub>AGRSP</sub> there is. . . [<sub>VP</sub> *t<sub>v</sub>* [<sub>SC</sub> a man in the room]]].

(45) [<sub>AGRSP</sub> there is. . . [<sub>AGROP</sub> [a man]<sub>i</sub> *t<sub>AGRO</sub>* [<sub>VP</sub> *t<sub>v</sub>* [<sub>SC</sub> *t<sub>i</sub>* in the room]]]

さらに、(37 b) に示したように、there は  $\phi$  素性を欠いているならば、(45) の主節の AgrS は there に対して  $\phi$  素性の照合を行うことができない。候補となるのは関連要素 *a man* である。もし、主節の AgrS が関連要素の  $\phi$  素性を照合するのであれば、(46) の表示がもたらされるであろう。

(46) [<sub>AGRSP</sub> [[a man]<sub>i</sub>-there] [<sub>AGRS</sub> is]. . . [<sub>AGROP</sub> *t<sub>i</sub>* *t<sub>AGRO</sub>* [<sub>VP</sub> *t<sub>v</sub>* [<sub>SC</sub> *t<sub>i</sub>* in the room]]]]]

(46) において、関連要素 *a man* は、主節の [Spec, AgrS] にある there に附加している。<sup>6</sup> このとき、AgrS の持つ  $\phi$  素性と関連要素のもつ  $\phi$  素性は矛盾してはならない。注目しておきたいのは、AgrS のもつ  $\phi$  素性と、既に AgrS が照合している動詞の  $\phi$  素性も矛盾してはならないということである。推移性によって、関連要素の持つ  $\phi$  素性と動詞の持つ  $\phi$  素性は、矛盾してはならないことになる。このことから、関連要素と動詞が一致の関係にあること (すなわち、(41) の特性) が導かれる。

一見して、(47)はこの分析に対する反例のように思われる。

(47) a. A man isn't t in this room.

b. There isn't a man in this room.

ここまでの分析に従うと、(47 b)に関して、関連要素 *a man* は LF において主節の [Spec, AgrS] に繰り上がり、そこで  $\phi$  素性の照合を受ける。結果として、(47 a) に似た LF 表示がもたらされる。ところが、実際は、(47 a) は (48 a) と (48 b) の解釈の間で曖昧であるが、(47 b) は (48 a) の解釈しかもない。

(48) a. There isn't any man in this room.

b. There is a man who isn't in this room.

このままでは、(47 b) において、関連要素が *not* の作用域 (scope) の外にある解釈が無いことが説明されない。

ここで、(47 a) と (47 b) の間の解釈の違いは、*there* が (49) (= (38)) の特性を持つことから導かれると提案する。

(49) *there* は作用域標識であり、且つ、存在数量詞である不定名詞句を非対称的に *m* 統御しなければならない。(cf. Williams (1984))

(50) *m* 統御:  $\alpha$  が  $\beta$  を *m* 統御するのは、 $\alpha$  が  $\beta$  を支配 (dominate) せず、且つ、 $\alpha$  を支配していない全ての最大投射  $\gamma$  が  $\beta$  を支配する時であり、この時に限る。(cf. Chomsky (1986b: 8))

(51)  $\alpha$  が  $\beta$  に支配されるのは、 $\alpha$  が  $\beta$  の全ての分節 (segment) に支配されている時に限られる。(cf. Chomsky (1986b: 7))

(47 b) に対する LF 表示 (52) を考えてみよう。

(52) [<sub>AgrSP</sub> [<sub>DP</sub> [<sub>DP</sub> a man]<sub>i</sub> [<sub>DP</sub> there]]] is... [<sub>NegP</sub> not [<sub>AgrOP</sub> *t*<sub>i</sub> [<sub>t</sub><sub>AgrO</sub> [<sub>VP</sub> *t*<sub>v</sub> [<sub>sc</sub> *t*<sub>i</sub> in the room]]]]]]

(52) において、*there* と関連要素 *a man* は、互いに相手を *m* 統御する関係にある。このような場合、(49) の要求を満たすために、関連要素 *a man* の [Spec, AgrO] から [Spec, AgrS] への移動は無効になると想定してみよう。<sup>7</sup> 結果として、もたらされる表示は (53) となる。

(53) [<sub>AgrSP</sub> there is... [<sub>AgrOP</sub> [a man]<sub>i</sub> *t*<sub>AgrO</sub> [<sub>VP</sub> *t*<sub>v</sub> [<sub>sc</sub> *t*<sub>i</sub> in the room]]]]]

LF 表示 (53) において、*a man* は *not* の作用域の内であって、外にはない。し

たがって、(47 b)における解釈の非曖昧性が導かれる。

(49)の仮定からさらに、(40)の特性を導くことができる。これは、(54)に示したように虚辞の *there* は、それが *m* 統御すべき存在数量詞を欠いている構造形に生起できないからである。

(54) \*There is true that John is honest.

### 3.2 虚辞の *it*

(55)に示されるように、等位接続された節が主語として用いられると、それは動詞と一致を示すことがある。

(55) That he'll resign and that he'll stay in office seem at this point equally possible. (McCloskey (1991: 564))

つぎに、(56)を考えてみよう。

(56) a. \*It seem at this point equally possible that he'll resign and that he'll stay in office.

b. It seems at this point equally possible that he'll resign and that he'll stay in office. (McCloskey (1991: 565))

(56 a)と(56 b)の対比から明らかなように、虚辞の *it* が主語として用いられると、その関連要素である等位接続節は、動詞と一致を示さない。その代わりに、主語位置にある虚辞の *it* が動詞と一致を示す。この事実は、(57) (= (37 a))の仮定から導かれる。

(57) 虚辞の *it* は格素性と  $\phi$  素性を持つ。

定義によって、虚辞の *it* は(虚辞の *there* とは異なり)  $\phi$  素性を持つので、AgrS はその照合領域にある *it* の  $\phi$  素性を照合する。さらに、この AgrS は主節動詞の  $\phi$  素性も照合するので、虚辞の *it* の持つ  $\phi$  素性と主節動詞の持つ  $\phi$  素性は両立してはならない。この要求を満たしているのは、(56 a)ではなく(56 b)である。

つぎに、虚辞の *it* が存在構文に現われない理由を考えてみよう。

(58) a. \*<sub>[AgrSP]</sub> it <sub>[AgrS]</sub> are <sub>[VP]</sub> *t<sub>v</sub>* [a man in the room]]].

b. \*<sub>[AgrSP]</sub> it <sub>[AgrS]</sub> is <sub>[VP]</sub> *t<sub>v</sub>* [many women in the room]]].

- c. \*<sub>[AgrSP it [AgrS are] [VP t<sub>v</sub> [many women in the room]]]</sub>.  
 d. \*<sub>[AgrSP it [AgrS is] [VP t<sub>v</sub> [a man in the room]]]</sub>.

(58)において、虚辞の *it* と AgrS と *be* 動詞の三者の  $\phi$  素性は対立してはならない。(58 a)と(58 c)はこの要求を満たしていない。したがって、(58 a)と(58 c)の AgrS は照合対象である V の  $\phi$  素性、または、名詞句の  $\phi$  素性のどちらかを欠くことになり、派生は破綻する。このこととは別に、(58 a)-(58 d)全てについて言えることは、虚辞の *it*、または、関連要素のどちらかが  $\phi$  素性の照合を受けられないということである。<sup>8</sup> これは、AgrS が  $\phi$  素性照合の対象にする名詞句が一つのみであることに起因する。もしそうなら、存在構文における虚辞の *it* の挿入は、結果として、派生の破綻を招くことになる。

#### 4 結語

本稿では、拡大投射原理の効果を照合理論から導くことを提案した。具体的には、(59)に示したように、拡大投射原理の効果は V や Tns の強い格素性が、Spell-Out の前に照合されなくてはならないという要求から導かれると主張した。

- (59) 拡大投射原理の効果、すなわち、節は必ず主語を必要とすることは、V や Tns の強い格素性が Spell-Out の前に、照合を済ませなければならぬという要求から導かれる。

(60)では、項の繰り上げによってこの要求が満たされている。

- (60) a. [<sub>IP</sub> John [<sub>VP</sub> *t* hit Mary]].  
 b. John believes [<sub>IP</sub> Mary to [<sub>VP</sub> *t* like him]].  
 c. [<sub>IP</sub> Mary was [<sub>VP</sub> hit *t*]].  
 d. [<sub>IP</sub> John seems to [<sub>VP</sub> *t* like Mary]].

一方、項の繰り上げによってこの要求が満たされない場合は、(61)が適用され虚辞が挿入されると提案した。

- (61) 虚辞は、それがあある主要部と格照合の関係を成す場合に限り、句構造に挿入される。

とりわけ、3節では、虚辞の *it* と *there* に関する (62) と (63) の仮定から、両者の分布の違いが説明できることを示した。

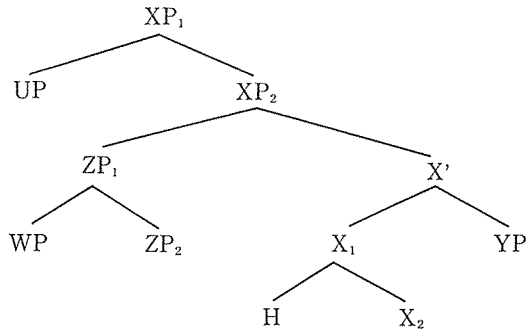
- (62) a. 虚辞の *it* は格素性と  $\phi$  素性を持つ。  
 b. 虚辞の *there* は格素性を持つが、 $\phi$  素性を欠く。
- (63) *there* は作用域標識であり、且つ、存在数量詞である不定名詞句を非対称的に *m* 統御しなければならない。

### 注

\* 本稿は、名古屋大学英文学会第34回大会(1995年4月22日、於名古屋大学)のシンポジウムで口頭発表した原稿に加筆し修正を加えたものである。

1 (i)において、主要部 *X* と *H* の照合領域はそれぞれ、(ii)-(iii)に従って、{*UP*, *ZP*, *WP*, *H*}、{*UP*, *ZP*, *WP*} として定義される。

(i)



(ii) 照合領域：主要部  $\alpha$  の補領域 (residue) に含まれるどの節点  $\gamma$  をとっても、それを再帰的に支配する接点  $\beta$  を含んでいるような最小部分集合。

(iii) 補領域： $\alpha$  の完全範疇最大投射 ( $\alpha$  を支配する分節全てからなる最小の最大投射範疇) に内包される接点の集合から、(1) 主要部  $\alpha$ 、(2)  $\alpha$  を内包 (少なくとも分節の一つに支配されていること) する接点の集合、(3) 補部の3要素を除いたもの。

2 Pollock (1989)、Chomsky (1991、1993、1994) 等の分裂 Infl 仮説 (split Infl hypothesis) を採用した場合、[Spec, I] 位置は [Spec, AgrS] として言い換え



られる。

- 3 VP 内主語がD構造表示に存在していたとしても、「節は必ず主語を必要とする」という要求が満たされていることにはならない。なぜなら、この規定が言及している主語位置とは、S構造表示における [Spec, I] 位置であるからである。
- 4 基底で補文の VP 内にあった要素は、補文の [Spec, AgrS] に立ち寄ることなく主節の [Spec, AgrO] に移動するかもしれない。この場合、VP 内主語の痕跡が補文の中で束縛されず、条件Aの違反を生じると指摘する人がいるかもしれない。しかしながら、この問題は照応形 (anaphor) に対する束縛領域 (binding domain) の定義の仕方しだいで解決される。例えば、Chomsky (1986 a) で用いられている完全機能複合 (Complete Functional Complex) に基づいて束縛領域を定義してみよう。VP 内主語痕跡に対する領域は、主節の AgrOP まで拡大する。この領域の中で、問題となっている痕跡は先行詞によって束縛される。
- 5 動詞 want は随意的に PRO の空格を照合できる補文を選択すると考えなくてはならない。これは、補文の主語位置に語彙的名詞句が現われる(i)のような形式が存在するからである。
  - (i) I want [<sub>CP</sub> e [<sub>TP</sub> John to leave the room]]
 

(i)の表示は、(ii)の表示から PF における補文標識削除の結果派生すると仮定する。

また、(ii)における *John* は、LF で [Spec, C] に移動し *for* によって格を照合されると仮定する。
  - (ii) I want [<sub>CP</sub> for [<sub>TP</sub> John to leave the room]]
- 6 [Spec, AgrS] にある *there* に付加した関連要素 *a man* の位置は、AgrS の照合領域から外れてはいない。注1 参照。
 

関連要素が LF において *there* に付加することに対する異なった仮定については、Chomsky (1991、1993、1994) を参照。
- 7 *there* への付加が LF で無効となることについての示唆に関して、Chomsky (1994) を参照。
- 8 但し、この論拠が成立するためには、虚辞と関連要素が別々の Agr 主要部によって照合を受けることがあってはならない。例えば、(58 b) と (58 d) において、主節の AgrS が *it* の  $\phi$  素性を照合し、一方、AgrO が関連要素の  $\phi$  素性を照合するならば、派生は収束するであろう。したがって、(i)のような仮定を設ける必要がある。
  - (i) *there* 構文において、

- a. AgrO は  $\phi$  素性照合に関して不活性である。
- b. AgrO は存在しないので、関連要素は AgrS と照合関係をなさなければならぬ。

本稿の段階では、(i)における(a)-(b)間の選択は未決定のままにしておく。

### 参考文献

- Authier, J-Marc (1991) "V-Governed Expletives, Case Theory, and the Projection Principle," *Linguistic Inquiry* 22, 721-740.
- Burton, Strang and Jane Grimshaw (1992) "Coordination and VP-Internal Subjects," *Linguistic Inquiry* 23, 305-313.
- Belletti, Adriana (1988) "The Case of Unaccusatives," *Linguistic Inquiry* 19, 1-34.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- (1982) *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and Binding*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- (1986a) *Knowledge of Language : Its Nature, Origin, and Use*, Praeger, New York.
- (1986b) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- (1991) "Some Notes on Economy of Derivation and Representation," *Principles and Parameters in Comparative Grammar*, ed. by Robert Freidin, MIT Press, Cambridge, Mass, 417-454,.
- (1993) "A Minimalist Program for Linguistic Theory," *The View from Building 20*, ed. by Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser, MIT Press, Cambridge, Mass, 1-52.
- (1994) "Bare Phrase Structure," *MIT Occasional Papers in Linguistics* 5.
- Chomsky, Noam and Howard Lasnik (1991) "Principles and Parameters Theory," (to appear in) *Syntax : An International Handbook of Contemporary Research*, ed. by J. Jacobs, A. von Stechow, W. Stenfeld and T. Vennemann, Walter de Gruyter, Berlin.
- Collins, Chris and Höskuldur Thráinsson (1993) "Object Shift in Double Object Constructions and the Theory of Case," *Papers on Case and Agreement II*

- (*MIT Working Papers in Linguistics* 19), 131-174.
- Fukui, Naoki and Margaret Speas (1987) "Specifiers and Projection," *MIT Working Papers in Linguistics 8 : Papers in Theoretical Linguistics*, 128-172.
- Hale, Kenneth and Samuel Jay Keyser (1993) "On Argument Structure and the Lexical Expression of Syntactic Relations," *The View from Building 20*, ed. by Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser, MIT Press, Cambridge, Mass, 53-109.
- Kayne, Richard (1985) "Principles of Particle Constructions," *Grammatical Representation*, ed. by Jacqueline Guéron, Hans-Georg Obenauer and Jean-Yves Pollock, Foris, Dordrecht, 101-140.
- Kitagawa, Yoshihisa (1986) *Subject in Japanese and English*, Doctoral dissertation, University of Massachusetts.
- Koizumi, Masatoshi (1993) "Object Agreement and the Split VP Hypothesis," *Papers on Case and Agreement I (MIT Working Papers in Linguistics 18)*, 99-148.
- Koompan, Hilda and Dominique Sportiche (1991) "The Position of Subjects," *Lingua* 85, 211-258.
- Kuroda, Shige-Yuki (1988) "Whether We Agree or Not : Comparative Syntax of English and Japanese," *Papers from the Second International Workshop on Japanese Syntax*, ed. by William Poser, CSLI, Stanford, California, 103-143.
- Lasnik, Howard (1992) "Case and Expletives : Notes toward a Parametric Account," *Linguistic Inquiry* 23, 381-405.
- (1993) "Lectures on Minimalist Syntax," *University of Connecticut Working Papers in Linguistics, Occasional Papers* Issue 1.
- Lobeck, Anne (1990) "Functional Heads as Proper Governors," *NELS* 20, 348-362.
- Martin, Roger (1992) "On the Distribution and Case Features of PRO," Ms., University of Connecticut.
- McCloskey, James (1991) "There, It, and Agreement," *Linguistic Inquiry* 22, 563-567.
- McNally, Louise (1992) "VP Coordination and the VP-Internal Subject Hypothe-

- sis," *Linguistic Inquiry* 23, 336-341.
- Pollock, Jean-Yves "Verb-Movement, Universal Grammar and the Structure of IP," *Linguistic Inquiry* 20, 365-424.
- Postal, Paul (1974) *On Raising*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Safir, Ken (1987) "So *There* ! A Reply to Williams' Analysis of *There*-Sentences," *MIT Working Papers in Linguistics* 9, 239-263.
- Saito, Mamoru and Keiko Murasugi (1990) "N'-Deletion in Japanese," Ms., University of Connecticut.
- Stowell, Tim (1982) "The Tense of Infinitives," *Linguistic Inquiry* 13, 561-570.
- Williams, Edwin (1984) "*There*-Insertion," *Linguistic Inquiry* 15, 131-153.
- (1994) *Thematic Structure in Syntax*, MIT Press, Cambridge, Mass.

Synopsis

On the Extended Projection Principle : A Minimalist Approach

By Mitsuhiro Ohmura

This paper concerns the effect of the Extended Projection Principle (EPP) (Chomsky (1982: 10)), that is, the phenomenon that clauses always have subjects. The Government and Binding Theory stipulated that clauses must have subjects, since this requirement could not follow entirely from the Projection Principle (Chomsky (1981: 38)). Thus, the expletive subject must appear at least at S-structure in (1), while it does not need a  $\theta$ -role.

(1) *It* is true that John loves Mary.

The problem is that the requirement at issue shares certain effects redundantly with Case theory and  $\theta$ -theory. I argue, adopting the minimalist framework (Chomsky (1993, 1994)), that the stipulation that clauses must have subjects may follow from the general checking requirement on formal features. The relevant assumptions are as follows :

- (2) Case features,  $\phi$ -features, operator features, inflectional features, etc. must be checked.
- (3) “Strong” features are visible at PF and “weak” features invisible at PF. These features are not legitimate objects at PF. . . if a strong feature remains after Spell-Out, the derivation crashes. (Chomsky (1993: 30))
- (4) The accusative Case feature of V and the nominative Case feature of Tense are strong in English.
- (5) An expletive may be inserted into the phrase marker  $\Sigma$  only if it enters into the Case checking relation with a head.

In the raising constructions in (6), the italicized DPs raise overtly to [Spec, [T AgrS]]. Tense checks their Case features and then discharges its own strong Case feature.

(6) a. [<sub>AGrSP</sub> T-AgrS [<sub>VP</sub> *John* hit Mary]].

- b. [<sub>AGRSP</sub> T-AgrS was [<sub>VP</sub> hit *Mary*]].  
 c. [<sub>AGRSP</sub> T-AgrS seems to [<sub>VP</sub> *John* like *Mary*]].

The expletive insertion is also driven so that the strong Case feature of Tense may be discharged before Spell-Out. In (7), for example, the expletive DP *it* is inserted into [Spec, [T-AgrS]], where its Case feature is checked by Tense.

- (7) [<sub>AGRSP</sub> [is-T-AgrS] true [that John loves Mary]].

It is also claimed that the effect of the EPP found in the complement clauses of the ECM verbs can be handled under the split VP hypothesis (cf. Koizumi (1993)).

- (8) We [<sub>VP2</sub> consider [<sub>AGROP</sub> *t*<sub>AGRO</sub> [<sub>VP1</sub> *t*<sub>V</sub> [<sub>AGRSP</sub> to [<sub>VP</sub> John loves Mary]]]]].

- (9) We [<sub>VP2</sub> consider [<sub>AGROP</sub> *t*<sub>AGRO</sub> [<sub>VP1</sub> *t*<sub>V</sub> [<sub>AGRSP</sub> to be a man in the room]]]]].

Since the Case feature of V is strong in English, DP *John* in (8) must raise overtly to [Spec, [V AgrO]]. As for (9), DP *there* is inserted into [Spec, [V AgrO]] so that V may check its Case feature.